

宮城山岳

第 24 号
2020 年 12 月



Miyagi Branch of The Japanese Alpine Club

目 次

1	巻頭の言葉	支部長 富塚和衛	2
2	2019年度の月例山行記録	事務局	4
3	2019年度の山行以外の宮城支部事業記録	事務局	23
4	2019年度宮城支部以外の行事参加記録	事務局	28
5	個人山行紹介及びエッセー		32
	栗駒山の思い出	草野洋一	
	百名山最後の山「水晶岳」	富塚和衛	
6	新会員、準会員自己紹介		36
	登山遍歴と近況について	加藤知宏	
	小学生登山で思うこと	新井田祐治	
7	追悼		39
	西郡昭光さんを偲んで	宇都宮昭義	
8	宮城支部定例事業の概要	事務局	43
9	宮城支部収支会計報告	事務局	44

表紙写真：ゴークョピークから望むエベレスト
(撮影：富塚和衛会員)

巻頭の言葉

コロナ自粛

支部長 富塚和衛

コロナで始まり、コロナで終わろうとする令和2年の師走に、移動自粛が言われている時期ではあったが、GoToトラベルを利用して中国・山陰地方のツアー旅に出かけた。理由は、以前から行ってみたいと思っていた、ある専門雑誌で、17年連続日本庭園ランキング1位の「足立美術館」がコースに含まれていたからである。食事にタグ付きの松葉ガニがでるのも魅力の一つではあったのだが。12月中旬、空路、神戸空港へ。此処からはバスでの長旅だった。車窓からの移り行く風景を楽しみながら時間を費やすのも旅の楽しみ方のひとつかもしれないが、1冊の単行本を持参し時間を費やした。

その一冊は、富士山測候所勤務の経験もある「強力伝」で直木賞を受賞した、加藤文太郎をモデルとした「孤高の人」、日本陸軍第8師団の歩兵第5連隊の遭難事件を題材とした「八甲田山死の彷徨」などの著作がある山岳小説の「新田次郎」の「アルプスの谷、アルプスの村」である。著者と5か国語に堪能な友人と二人でヨーロッパアルプスの谷間の村々を訪ね歩く旅紀行の小説だ。二人が旅した村々の幾つかの村を、数年前に訪れたことがあった。そんな事もあり、この機会に、積読して置いたものを引っ張り出してきたのだ。

二人が最初に向かったのは、ベルナーオーバーランド三山(アイガー、メンヒ、ユングフラウ)を背景とした避暑地、グリンデルワルトの村である。長旅の荷を紐解いた宿は、1921年9月に榎有恒がアイガー東山稜(ミッテルレギ)の初登頂を成し遂げた時のガイドの一人、シュトイリの甥のホテル。二人は、此処からアルプスの谷、村を迎える旅が始まる。因みに、此処を走る山岳鉄道駅にクイシャ行クと言う駅がある。その近くのアルムに新田次郎の墓がある。其処からのベルナーオーバーランド三山等の山岳風景は将に絵葉書に勝るとも劣らない絶景だったことを思い出す。その後、二人は、著者が「石の巨人」と呼んだブアリス山群の「マッターホルン」の麓の村「ツエルマツ」を訪れ、マッターホルン初登頂者の「ウインパー」が宿泊した「ホテル・モンテロザ」に宿を取る。この件では、雲に隠れて姿を見せない石の巨人の姿を待ってシュワルツゼー

一帯を歩き回る著者の姿が描かれているが、夕日に泥むゼーに写る逆さ「マッターホルン」は、今も目に焼き付いている。二人の、アルプスの谷、村の旅は続き、モンブランを英主と仰ぐモンブラン山群の麓のシャモニーの後、ドフィーネ山群の村々、最後にスイスのサンモリッツを訪れてアルプスに別れを告げる。東に続くチロルの山々に後ろ髪を惹かれつつ。

寒さが増すにつれ、新型コロナウイルス感染拡大は関数的な増加傾向が見られ、医療提供体制の逼迫・崩壊が、日夜、マスコミ等で報道されている。これがオオカミ少年の如きなのか、若者を中心に陽性者の数は収まる気配はない。更に、感染力の強い変異種も世界各地で確認されている。感染と経済のバランスを重んじてきた政府も重い腰を上げ、GoToトラベルの一時中止を発表した。年末年始は、移動を自粛した巣ごもり生活を余儀なくされる。時間は十分ある。こんな折には、活字離れが言われて久しいが、静かに活字を目で追う作業を楽しむのも「新しい生活様式」と言う言葉には馴染まないかもしれないが有意義な事ではないだろうか。

宮城支部の会員等も高齢化が進み、所謂、新型コロナウイルスに感染すると重症化が懸念される年齢の方が多数おられる。イギリス、アメリカ等では、ワクチンの接種も始まった。我が国においては年度末を目途に準備が進められているようだが、少なくとも、ワクチン接種が始まるまでは、危機感を持って、私を含め行動を控え感染防止に努めたいものである。医療提供体制の危機が叫ばれる中、医療への負荷を掛けないためにも。



ユングフラウ三山(アイガー、メンヒ、ユングフラウ)

2019 年度月例山行記録

【共益事業山行】

(1) 春山山行(蛤山)

・実施日:平成 31 年 4 月 13 日(土)

・山域:蛤山 1014m(伊具郡七ヶ宿町)

・コース:南蔵王青少年旅行村駐車場より南 200m 先の国道 113 号沿い林道
口出発—林道—林道終点—登山口—最高地点—蛤山山頂(葉山神社)—(同
コース下山)—国道 113 号沿い林道口帰着 ・参加者:(会員)遠藤銀朗、太田
正、加藤知宏、草野洋一、佐藤昭次郎、千葉正道、冨塚和衛、冨塚眞味子、鳥田
笑美、(支部友会員)佐藤富士子、白田昭一、多田孝徳、鳥田伊志、針生紀子
(計 14 名)

・報告者:太田正

蔵王青少年旅行村駐車場より少し南
の登山口に近い場所に集合する。今
回は、穏やかな天気恵まれ絶好の登
山日和で、林道を 1 時間くらい歩いた
ところから登山口に入る。ここからは
本格的な登りが尾根まで続くが、途中
右手に不忘山と南屏風岳の稜線が青
い空にくっきりと白く輝いて見え、小休
憩時の展望は申し分ない。しかし、

前々日に降雪があり標高 900m 付近から頂上部にかけて一面に硬い雪が残っ
ていた。稜線に出てからは、15cm ほどのやや深い雪に足を取られながら程
なく最高地点 1,014m のピークに到着した。そのまま進み、葉山神社が祀られ
ている蛤山山頂で昼食をとり、1 時間ほど休憩して往路を下山する。

この山に以前登ったときには、最高地点のピークのすぐ下あたりでしか展
望がひらけなかったのが、落葉している時期にと考えての山行の計画であっ



たが、残雪があるとはいえ稜線全体が展望が開けていて予想を超える景色を見ることができた。ただし、今回のように直前に春の雪嵐があったり、近年の豪雨被害のような異常気象が頻発していることを思うと、予想外の気象による危険に注意しなければならないことをあらためて考えさせられました。

(2)ヨーロッパアルプストレッキング(特別企画)

- ・実施日:令和元年7月5日(金)～15日(月)
- ・山域:チロル、ドロミテ(オーストリア、イタリア)
- ・参加者:(会員)千葉正道(リーダー)、冨塚和衛、鳥田笑美、草野洋一
(支部友会会員)佐鳥田伊志、(一般)高橋彰、千葉誠一 (計7名)
- ・報告者:草野洋一

七月初旬にオーストリア、イタリア・アルプスのチロル、ドロミテ地方の山へ千葉正道会員をリーダーに7人でトレッキングしてきました。

○5日(金) 6人が仙台空港に集合して成田空港へ。千葉誠一さんと成田空港で合流。10時10分発スイスエアラインズ航空でチューリッヒ国際空港に15時35分着(現地時間、時差7時間)。マイクロバスでオーストリアでもスキーリゾートとして有名なチロルの St. Anton am Arlberg(ザンクトアントン=標高 1,284 m)のホテル GRIESHOF に19時30分チェックイン。



○6日(土) 快晴 ガルツィヒ・ロープウェーと valluga ゴンドラと二本のリフトを使って Valluga 峰(2,811m)山麓をトレッキング。草原、松林などの樹林帯の中、遠方には雪をかぶった山々を見ながら歩く。下山途中、日本びいきの山小屋 Senn Hutte に立ち寄り、地ビールとスープと黒パンで遅い昼食をとる。ホテルへ帰る途中で「スキーと郷土博物館」を見学。15時30分ホテル。夕食までに時間があるので何人かは地下のプールサウナにはいる。

○7日(日) 晴一時雨 朝方一時雨だったがその後晴れる。ホテルそばのバス停から30分余で欧州の王室もやってくるというレツヒの街へ。オーバーレツヒ方面に散策する組とゴンドラで Rufikopf (2,363m)の展望台に行く組に分かれる。12 時 11 分のバスでホテルに戻る。



午後、Gampen bahn のリフトで Kapall (2,326m) へ向かうも強雨で 13 時 30 分、レストハウスで雨宿りかねて昼食をとる。そのあと Kapall bahn のリフト2本を乗り継いで行くも雨脚が強く、2本目のリフトを下へ降りると雨も止んだので 14 時 50 分に街までトレッキング。ホテルに 17 時 10 分着。

○8日(月) 晴一時雨 8 時 50 分、専用車でインスブルックに近い Neustift (標高 1,000m) へ。ホテル BERGJUWEL に 10 時 20 分にチェックイン。荷物をおいてゴンドラ Elfer bahn を使い、降りて 11 時すぎに出発。Elfer hutte (2,080m) に 11 時 52 分着。主峰は Elfer (2,505m)。我々はトレッキングコースに向かう。ランチの時間だったが空模様がよくないので先を急いだ。案の定、途中で雨合羽を着る天気となった。コース左側には谷を挟んで大岸壁が何百メートルと続いていた。谷に下りて Pinniss hutte (1,557m) に 14 時 20 分に着いた。ここでスープとパンと牛乳で遅い昼食をとる。

ここから川沿いに歩いてホテルに 17 時 20 分着。夕食はホテルから歩いて数分のレストラン「Bergkonig」でディナー。

○9日(火) 快晴 ホテル近くのバス停から Top of Tyrol へ。9 時 20 分、終点の Mutterberg ゴンドラ乗り場着。Stubai gletscher bahn のゴンドラと 3 本のリフトを乗り継いで 10 時 10 分、Top of Tyrol (3,210m) に到達。周囲は 3,000m 級の山並



みが連なりゆっくりと展望を楽しんだが気温が 10 度前後と寒かった。周辺は残雪が多く、夏スキーができる雪渓が広がっていた。11 時下山。コースは雪渓、ザラ場などのアップダウン。横切る沢は雪解けで流量多く、流れが速い。12 時 50 分、Dresdner hutte で休憩してバスが出るゴンドラ乗り場へ。14 時 30 分のバスに乗り、15 時 10 分、ホテル着。ホテルのケーキとティー・コーヒーを楽しむ。夕食は昨日と同じレストランでディナー。

○10日(水) 快晴 8 時 40 分、チャーターしたバスでイタリアのドロミテ山域の中心地 Cortina Dampezzzo (1,210m) へ向かう。途中、セラ山群の最高峰 Piz Boe (3,152m) 山に登るため 11 時 25 分、ポルドイ峠 (2,239m) からゴンドラに乗り、12 時登山開始。一部残雪の残る登山路で 13 時 58 分、Piz Boe 山頂。



ピツボエ山頂

360度広がるドロミテ山群の眺望を楽しんだ。山頂 hutte で昼食。15 時、下山。16 時 35 分、ゴンドラ乗り場着。17 時に専用車に乗り、18 時 20 分、ホテル TRIESTE にチェックイン。

○11日(木) 晴 8 時 38 分のバスで “ドロミテの真珠” といわれるミズリーナ湖へ。しばし風景を堪能して再びバスに乗り、三つの岩峰 (ピッコロ、グランデ、オヴェスト) で有名な Tre cime (2,999m) =ドライチンネン=へ向かう。人気コースとあって道路は渋滞。登山口のオウロンツォ小屋 (2,320m) を出発したのは 10 時 55 分。岩壁をロッククライミングしているクライマーを見ながら 12 時 30 分にロカッテリ小屋 (2,405m) に着いて昼食をとる。ロカッテリ小屋はイタリア山岳クラブ (CAI) が 7~9 月の間だけ運営しているという。13 時 30 分に出発。Tre cime を一周する裏側のコースを歩く。途中、高山植物の花の群落

を見ながら登山口の小屋に 16 時着。16 時 50 分発のバスに乗り、コルチナのバス停に 17 時 50 分着。



ドラ仔ネ

○12日(金)曇 8 時 45 分のバスで Cortina Dampezzo をはさんで Tre cime の反対側にあるファルツアレゴ峠(2,105m)へ。峠からゴンドラでラガッツオーイ小屋(2,752m)へ。主峰はラガッツオーイ(2,989m)。ここは第一次世界大戦でオーストリアとイタリ軍の激戦地として塹壕等が保存されている。下山途中、モーマットの親子連れが食んでいるのを見ながら峠のバス停へ。12 時 20 分のバスで Cortina へ戻り、ホテルで一休みして午後は皆と市内見物。

○13日(土)晴 ホテルを 9 時にチャーターバスで出発。ベネチアに向かう。11 時 25 分、ホテル PLAZA に到着。ベネチアの街のガイドをしてもらうエリザベッタさんが出迎えてくれる。昼食はエリザベッタさんお勧めの路地裏にあるレストランでパスタボンゴレ等を食す。路地裏を歩いてサンマルコ広場へ出る。ここでお茶する組とオペラハウスの Al Teatro の場内を見学する組に分かれる。17 時からエリザベッタさんの計らいで、作曲家ビバルディが隣に住んでいたというサン・ピエタ教会で The Tiffin girls' school による合唱団とシンフォニーの演奏を一時間余聞いてホテルに帰る。

○14日(日)晴 午前は近くのスーパーマーケットへ行くなど自由行動。15時30分発ベネチア・マルコポーロ空港からウィーン空港で乗り継いでオーストリア航空 18 時発の便で成田空港へ。

○15日(月)晴 11 時 55 分(日本時間)成田空港着。千葉誠一さんは空港から自宅へ。6人は16時発ANAで仙台17時着。全員元気で帰仙、空港で解散。



連日のトレッキング(最長は6時間20分)で、どのコースも周囲の山並みを見ながらの十分にアルプスを堪能した日々でした。主なトレッキングコースには番号がついていて、分岐点などに表示されている。チロルは山麓が緑の絨毯とっていいほどの牧草地が広がっていて、牛はあちこちで草を食んでいる。そして街の中をゆったりと牛舎へ帰っていく。車も歩行者も通り過ぎるまで待っている。対照的にドロミテ山群は急峻な山並みが目前まで迫っていて迫力があつた。ホテルは谷あい集中し、高くても4,5階建て。どのホテルも窓、ベランダには花が飾ってある。冬のハイシーズンと違って夏はロウシーズンで宿泊者は多くはなかったが、トレッキングコースのハイカーは多かった。ホテルでの朝食、夕食はおいしかった。今回の山旅は通訳、ガイドなしでリーダーの千葉正道会員には飛行機、ホテル、バス、コース選定などですっかりお世話になりました。

(3)夏山山行(南八ヶ岳)

・実施日:8月3日(土)~5日(月)

・山 域:南八ヶ岳

・コース:美濃戸口→赤岳山荘(泊)→赤岳鉱泉→硫黄岳→硫黄岳山荘(昼食)→横岳→赤岳→赤岳頂上小屋(泊)→行者小屋→赤岳山荘→美濃戸口

・参加者:(会員)草野洋一、遠藤銀朗、冨塚眞味子、冨塚和衛、太田正、加藤知宏(支部友会員)村上敏郎、蔭山美緒子、針生紀子、多田孝徳、佐藤富士子(計11名)

・報告者:富塚和衛

今年で5回を数える夏山山行を南八ヶ岳で、昨年と同様の時期に実施した。ハプニングもあったが、好天の下での山旅を楽しむ事が出来た。

○8月3日(土)5:40 仙台駅東口駐車場に集合。3台の車に分乗し美濃戸口に向かう。途中のSAで朝食、昼食を白樺湖の蕎麦屋で摂る。お昼過ぎからゲリラ豪雨を思わせる土砂降りの雨に見舞われるが、美濃戸口着く頃は雨も上がる。狭い砂利道を美濃戸口から登山口的美濃戸に向かう途中にハプニングが起きた。すれ違いのためにバックした富塚車が沢に落ちてしまったのだ。幸い怪我はなかったが、車は鼻を天に向け身動きが出来ない状況になってしまった。JAFに救助を要請して事なきを得たが、予定は大幅に遅れ、予約していた赤岳鉱泉をキャンセルし、急遽、美濃戸の赤岳山荘にお世話になることにした。お蔭で、夜はこの予期せぬアクシデントに花が咲き深酒となってしまった。

○8月4日(日)遅れを取り戻すため、6時前に赤岳山荘を出発する。8時前に赤岳鉱泉到着。此処で体調が優れない富塚(真)会員、針生支部友(赤岳鉱泉から行者小屋に直行し宿泊)を残し、南八ヶ岳縦走に向かう。シラビソの樹林帯の中を柳川の北沢沿いに硫黄岳を目指す。森林限界を抜けた処に位置する赤岩の頭で一休み。此処からは視界が一気に開け、八ヶ岳のパノラマを楽しみながらの稜線歩きとなる。硫黄岳(2742m)から緩やかにオシユレットがある硫黄岳山荘へと下り昼食を摂る。

山荘から八ヶ岳で最も花が豊かな横岳(2829m)へは縦走コースでも難所が待ち受ける。梯子と鎖を使い稜線の左右へ行ったり来たりしながら高度を稼いで行くと奥の院と言われる横岳山頂に着く。時期が合えばウルップソウやツクモグサ見られる花の宝庫の稜線伝いに三叉峰・日ノ岳と過ごし下って行くと赤岳天望荘に辿り着く。此処で一休み。昨晚の深酒が影響しているのか足取りが重い人も現れ始める。

息を整えて赤岳北峰に建つ今宵の宿赤岳頂上小屋を目指す。待ち受けるのは最後の難所となる急斜面。喘ぎながら歩みを進め、やっとの思いで頂上小屋に辿り着く。ザックをデボして赤嶽神社がある南峰(2899m)に向かう。此

処で記念写真を撮り戻って小屋にチェックインする。時刻は 16 時を過ぎていた。10 時間もの長丁場の山行となってしまった。やはり昨日のアクシデントの影響が出てしまった。

それでも、夕食ともなれば、一日の疲れを癒してくれるビールは欠かせないとはばかりに複数杯飲む兵も。

○8月5日(月)6:00 から皆で朝食を頂く。頂上小屋の食堂は抜群のロケーションにある。窓越しに朝靄に霞む富士山が見て取れる。富士の山を拝みながらの朝食もまた乙なものだ。朝食後、早々、昨日分かれた2名が待つ行者小屋へと向かう。一旦、中岳に向かい文三郎尾根ルートに道を取り、一気に行者小屋へと下る。行者小屋でコーヒーを飲みながら一休みする。



赤岳山頂付近から富士山を望む

左に阿弥陀岳(2805m)を見ながらシラビソ林の中を南沢沿いに美濃戸に下る。赤岳山荘に立ち寄り冷やして貰っていた太田・富塚農園で育て持参したトマトを頬張りながら、火照った身体を冷やしつつ真夏の南八ヶ岳縦走を振り返る。恒例の夏山山行はアクシデントに見舞われたが無事終了した。

(4)初冬山行(七ツ森)

- ・実施日:令和元年 12 月 8 日(日)
- ・山域:七ツ森 松倉山 291m、撫倉山 359m、大倉山 327m(黒川郡大和町)
- ・コース:信楽寺跡駐車場－松倉山山頂－撫倉山山頂－大倉山入口の標識－大倉山山頂－《昼食》－蜂倉山への標識(分岐)－大倉山入口の標識－梅の木平展望台－信楽寺跡駐車場
- ・参加者:(会員)横山哲、遠藤銀朗、加藤知宏、草野洋一、千葉正道、富塚和衛、富塚真味子、鳥田笑笑

(支部友会会員) 村上敏郎、山田孝司、津久井宏、佐藤富士子、白田昭一、多田孝徳、川嶋郁子

(一般) 神鳥浩典

(計 16 名)

•報告者:加藤知宏

今回山行集会委員として、初めてリーダーを務めることとなった。

当日は、気温は低いものの、降雪はなく、穏やかな天気恵まれた絶好の登山日和だった。信楽寺跡駐車場から松倉山に続く道では、10月の台風第19号の影響で、水路に架かるコンクリート橋が崩落していたが、脇にある梯子で先に進むことができた。ここから松倉山山頂までは、急登が続いた。参加者の歩行ペースを確認しながら歩を進めた。松倉山山頂の南側にある1等三角点も確認した。展望は木々の隙間から見える程度。その後、山頂から北へ下り左折する。杉林を通り、尾根に出て、展望が開けると撫倉山の山頂に着いた。山頂からは吉岡の市街地や遠くには古川の街並みを一望することができた。大展望を楽しんだ後は、大倉山山頂



大倉山山頂

へと向かう。下り途中、天狗のすもうとり場や蟻ノ戸渡りの岩場とハシゴ場がある。慎重に通過し、急坂の尾根を下っていく。下りきると、今度は大倉山山頂に向かう急登が待ち構えていた。登っては下るの繰り返しだ。この急傾斜の山腹に登りきると、樹林の中に大倉山の山頂が見えた。ここで小一時間、昼食をとる。昼食後、山頂から少し戻り、そのまま西へ急坂を下り、蜂倉山への分岐、大倉山入口の標識を經由し、七ツ森自然遊歩道を下っていく。途中、梅の木平展望台で10分ほど休憩を取り、出発地の信楽寺跡駐車場に14時30分に到着した。メンバー皆元気な様子で、ほぼコースタイム通りで到着することができた。

今回山行の総括として、16 名の大所帯での活動ということもあり、ペース配分の難しさを感じた。今後の山行でリーダーを務める際は、メンバー各員の疲労度、歩くスペース、休憩のタイミングなど全体を掌握しながら落伍者が出ないように努めていきたいと思う。

最後に、職場の同僚で広島県から派遣で来ている神鳥さんを始め、多くの方に参加いただき、ありがとうございました。

(5) 厳冬期山行(黒鼻山)

・実施日:令和 2 年 2 月 11 日(月)

・山域:船形連峰黒鼻山(842,7m)

・コース:泉ヶ岳大駐車場⇒水神コース登山口⇒関口⇒(サビ川渡渉)⇒背尾根⇒黒鼻山山頂⇒(登路下山)⇒駐車場

・参加者:佐藤昭次郎、草野洋一、冨塚和衛、冨塚真味子(以上会員)、山田孝司、多田孝之、佐藤富士子(以上支部友) 計 7 名

・報告者:佐藤昭次郎

最近の温暖化で、厳冬に相当する地域は北海道くらいかな?と、思えるほど近年はその進行を顕著に感じる。今回 厳冬期山行の対象とする、「黒鼻山」普段はこの地の人気の山、「泉ヶ岳登山」の際背景となる山である、それだけ登山者が少なく雪と遊ぶには丁度いい山なはずであるが、この冬は記録的な暖冬と小雪で、仙台市民のスキー場であるここのスキー場は未だ開設していない。

この場所を集合場所として、7:45 分にメンバーが揃う。今回の行動計画と雪の状態からカンジキ携行を確認後、予定通り 8:00 時行動開始。路面は未だ凍っているが積雪は無し、泉ヶ岳水神コースを入ると間もなく 8:20 分「関口」の表札板がある、この場所「堰」が正しいのでは?と思いながら、ここから分かれヒザ川を渡渉する、今年は昨日の入山者のトレースがそのまま残るほど雪が無い。カンジキなしでコースを辿り、途中で休憩を入れながら尾根上の三叉路へ 9:25 分着、積雪は例年の半分もない。

ここで息を整え、あとは尾根上の樹林帯の中を 25 分、黒鼻山表札板が頭上の木にくくられている山頂着 9:25 分、記念写真を撮り、余りにも早い到着で下山して昼食することを確認後、休憩とした。

9:45 分下山開始、時間がたっぷり今回ならではのコース取りの面白さを実感して頂くように、途中から麓の林道(宮城の自然歩道 泉区～青葉区定義)経由し、登山口に戻るコースに変え、厳しさの無いのんびりとした山行を参加者であじわい 12:10 分登山口に戻り施設食堂での昼食をしながら反省会を、冬季の体力維持を目的とした山行を終えました。

(6)早春山行(小斎峠から鹿狼山縦走)

・実施日:令和 2 年 3 月 28 日(土)

・目的地:小斎峠から鹿狼山縦走

・コース:(7:30)鹿狼山登山口集合～(車で小斎峠まで移動)～(8:05)小斎峠登山開始～金華山(8:20)通過～音羽森(8:50 着 9:00 発)～主義山(9:25 着 9:30 発)～権現堂山(10:00 着 10:10 発)～地藏森(11:10 着 11:15 発)～福田峠(11:50 着【昼食】12:20 発)～五社壇(12:50 着 13:00 着)～鈴宇峠(13:20 着 13:25 発)～鹿狼山着(14:30 着 14:40 発)～鹿狼山登山口着(15:15) 解散

・参加者:千石信夫、富塚和衛、富塚真味子、佐藤昭次郎、千葉正道、横山哲、草野洋一(以上会員)、村上敏郎、鳥田伊志、多田孝徳、佐藤富士子、山田孝司(以上支部友)、川島民子、工藤千鶴子、斎藤みい子、佐藤洋子、白幡典子、森宮子(以上一般者) 計 18 名

・報告者 千石信夫

平成 31 年度の最後の行事となった早春山行。一昨年に続き阿武隈山地を選定した。

今回は山元町と丸森町との境界の小斎峠を起点として鹿狼山までの全長約10kmの行程を凡そ 7 時間を想定し計画した。

28 日早朝 7 時 30 分に鹿狼山登山口(新地町)に集合。早朝から駐車場には一般の登山者が登り始めていた。天候は長期予報では雨予想であったが、運よく曇り程度で好調な滑り出しとなった。

参加者を確認し、本日の行程内容説明後、車を4台にまとめて小斎峠まで移動した。山元町側から峠を越え二股を左方向に走行してすぐに左側に駐車スペースがある。その地点から18名で登山開始する。金華山までは急な登りを15分ほどで到着。途中1人体調不良により引き返し高橋二義車で収容となった。金華山を過ぎた頃から地蔵森の間は特に倒木が多く大木を跨いだり潜ったりと苦労の連続であった。台風や強風の傷跡が生々しい状況であった。主義山を過ぎ花嫁峠のあたりもルートが分かりにくい状態であった。権現堂山から地蔵森までのルートでは稜線沿いにルートをとる笹藪が刈り払いされている部分を辿り登山道から外れてそのまま地蔵森に到着した。

地蔵森からは若干西よりに登山道が続いておりそのまま福田峠まで下る。福田峠で高橋会員と合流し一緒に昼食とした。ここで2名がリタイアすることになり、15名で縦走継続する。ここからは登山道も倒木も少なくなって前半から比べれば歩きやすくなり順調に距離を稼ぐことができた。

五社壇からは特に迷うようなところもなく途中からは林道に入り鈴宇峠まで下る。いよいよ最後の鹿狼山の蔵王眺望コースの登山口に到着小休止して七峰目(ななうねめ)の鹿狼山に向かう。ここからはさらに登山道は整備され歩きやすくなったが、勾配もきついところもあり特に山頂直下のロープが設



置してあるところは最後の登りで苦労した。14:30鹿狼山に到着山頂からは眺めはよく西には蔵王の山々、北には遠く栗駒山が微かに真っ白く見え、我々を楽しませてくれた。いつ来てもここは眺めが良い所だ。記念写真撮影し樹海コースを下山する。

前半の部分ではあまり花を見かけなかったが、後半はフサザクラ、カタクリ、イチゲなどが綺麗に咲いており疲れを癒してくれた。15時15分登山口駐車場に無事七峰縦走終了した。

今回の山行では、二口山歩会の皆さんが参加されいつになく大人数となり楽しく歩くことができました。

このルートは、2018年に三宅会員と二人で歩いているが、その時はあまり迷うようなところはなかったのだが、今回は今年の台風や今年に入ってから度々の強風などの影響もあってか、かなりの倒木があり歩きにくく、そのうえルートが分かりにくくなっていた。そのような状況でも所要時間はあまり変わらず予定の時間に下山できた。

【公益事業山行】

(1) 第8回親子登山教室(戸神山)

・実施日:令和元年5月19日(日)

・山 域:仙台市太白区、戸神山(504m)

・コース:仙台市広瀬文化センター(集合)→戸神山登山口→市水道局施設前→表・裏登山道分岐点→裏コース→女戸神山山頂→鞍部→男戸神山山頂→表コース→表・裏登山道分岐点→戸神山登山口→仙台市広瀬文化センター(解散)

・参加者:(会員) 富塚和衛、佐藤昭次郎、草野洋一、富塚真味子、加藤知宏

(会友)針生紀子、白田昭一

(応募参加者)7家族の申し込みあり。当日1家族の4名キャンセル、7家族22名(親子および祖父の参加)

・報告者: 佐藤昭次郎

実施当日は、8:30に仙台市広瀬文化センター前駐車場に集合して、車分乗により白沢峠の登山口に向け出発。前回第6回のリピーターも居て、家族登山が継続される事は「山の日」の主旨にも合致する事と思いながら、雨の心配がない新緑の登山日和を峠の駐車場に9:20着。

登山開始に先立ち登山口から少し入った市水道局の施設前で、「安全に山に登るために」と題して(佐藤会員担当)現地の地形図を配布し各家族に地図を置いて貰った。そこで現在地の高度は凡そ何メートルか?の質問から教室

は始まった。各親子で地図に向かい判明した家族から発表してもらいました。そこで基本となる地図の見方を学習し、さらに山の歩き方や水分のとり方などを(草野会員担当)学習した後、準備にストレッチ(富塚真味子会員担当)を実施した。

その後、9:40 に登山を開始し、裏コースを進み 11:05 に女戸神山山頂に到着した。ここで休憩の後鞍部を経て一番急な「熊落とし」も一気に 11:30 に目的地である男戸神山山頂に登頂した。新緑のこの時期は他の登山者も居て賑やかである。ここで昼食休憩をとる。

後続の登山者も増え、場所を譲る意味でも早めに下山を開始し、前回の斜面のぼりをする事を約束し参加者全員で記念撮影後に、12:00 に下山を開始。前述の鞍部から表コースを下山し、12:40 に戸神山表コース・裏コース分岐点到着した。この分岐点で休憩時間をとるとともに「リピーターの要望が強い、子供たちの急坂登りと急坂ロープ下りの体験トレーニング教室を親御さんの了解の下に実施した。この急坂登り下り体験は、参加した子供達にとって身体の安全を確保しながら急坂を登ったり下ったりするための知識と技術を、体全身で楽しみながら実践的に学ぶよい機会になったと思われる。終了時に子供たちに草野会員制作の筒笛がプレゼントされ、登山口まで色々な音色の行進が続いた。

14:20 に登山口まで下山し、解散式を行い、15:00 に第 8 回親子登山教室の全日程を終了した。

(2) 第 7 回登山教室(船形山)

- ・実施日 令和元年 6 月 9 日
- ・山 域 船形山(1,500m)
- ・コース 旗坂キャンプ場—升沢小屋—升沢—船形山頂—蛇ヶ岳—升沢コース合流点—旗坂キャンプ場
- ・参加者 (会員) 富塚和衛、太田正、加藤友宏、草野洋一
(支部友会員) 津久井宏、多田孝徳、佐藤富士子
(一般) 小山敏男 (計八名)

・報告者: 草野洋一

第7回登山教室を船形山で行いました。前日が雨で、当日は曇り予報で不安もあったが、出発時から日射しが出てきて天候に恵まれた山行になった。参加者ははじめ13人(一般4人)だったが、前日、当日にキャンセルがあって結局8人で7時55分にキャンプ場を出発した。

升沢小屋まではブナ林の林間の緩やかな尾根道を順調に登る。途中の三光の宮の展望台に立ち寄り、船形山頂をはじめとして周囲の山々を見渡すことができた。升沢小屋から今コースの難所になる沢登りに。岩がぬれていて滑るので注意することを確認して、一同気を引き締めて出発。右岸、左岸の大小の岩登行。

残雪の斜面にでたところでアイゼンを装着する。残雪を抜け出したところからルート上の登山道となる。千畳敷から尾根筋に出たところで、黒伏山から仙台カゴなど周囲の山々を望むことができた。山頂に12時半前に到着。山頂には数人しかいなかった。避難小屋で昼食をとる。

下山は蛇ヶ岳を経由して升沢コースにでた。蛇ヶ岳からは残雪斜面が二カ所あり、アイゼンをつけた。そこで雪面斜面の歩き方を太田会員からレクチャーしてもらいました。升沢コースに出てから途中、津久井さんの案内で大きな岩に刻まれている観音像を皆で見学した。言われないと通り過ぎてしまう場所だった。17時15分、キャンプ場に全員下山。各自帰路につきました。

今回の升沢コースは歩行時間が長いのと升沢の登行に神経をつかった。ところどころに赤布がかかっていたのでルート選択の目印になった。

(3)第9回親子登山教室(達居森)

・実施日:令和元年9月22日(日)

・山 域:宮城県黒川郡大衡村・大和町、達居森(262m)

・コース:野ダム堤体下駐車場(集合)→達居森新登山口→

新登山道コース→肩の広場着→達居森頂上→達居森展望台→新道・旧道分岐点→208m 峰展望台→旧登山道コース→旧登山口下山→牛野ダム堤体下駐車場

- ・下山後に牛野ダム堤体下駐車場にて参加者全員で芋煮会を開催
- ・参加者:(会員) 富塚和衛、太田 正、草野洋一、高橋二義、三宅 泰、横山 哲、富塚眞味子、遠藤銀朗(支部友会会員)川島郁子、津久井宏、津田久美子、針生紀子(応募参加者)8 家族 29 名の申し込みが 当日 3 家族の 10 名キャンセル、5 家族 19 名(保護者 8 名、子供 11 名)(計 31 名)
- ・報告者:遠藤銀朗

実施当日の天候は曇りであったが、午後より雨との予報が出ていたため現地 9:00 集合の当初予定を前日に変更・連絡し、8:30 に牛野ダム堤体下駐車場に集合。開講式で富塚支部長の挨拶、教室スタッフの紹介と登山ルートの説明および準備体操を行ったのちに達居森新登山口に向かう。

8:50 に新登山口より登山開始。9:10 に新登山コース肩の広場に到着。休憩を取りながら草野会員より「登山における注意」「登山の楽しみ方」および「スズメバチ対策」についての第1回目の授業がなされた。9:35 見晴らし峠通過、9:45 達居森山頂到着し参加者全員で記念写真を撮影。

10:00 展望台到着。ここでは、「山での基本的な歩き方」および「達居森の地名の由来と自然」について第2回目の授業が遠藤会員によりなされた。大衡村・大和町・富谷市・仙台市そして七つ森の眺望と泉が岳・船形山(これらは一部雲の中であったが)の景観を楽しんだ後に、再び参加者全員で記念写真を撮影した後、10:25 に下山を開始。

10:45 に 208m 峰展望台への分岐点を通り 10:55 に旧道展望台に到着。その先の東屋まで行く予定であったが、途中に「スズメバチ営巣のため通行禁止」のテープがあり旧道新道分岐点まで引き返し、その後は計画通り旧道を下り 11:15 旧道登山口に下山。

旧道登山口付近で、参加した子供たちとともに秋の木の実(栗の実、ガマズミの実およびアケビの実)採りを楽しんだのち、11:30 に牛野ダム堤体下駐車場に帰着。

11:30 から牛野ダム堤体下駐車場空き地において参加者全員で芋煮会を開催。高橋二義会員・三宅泰会員・富塚眞味子会員および針生紀子支部友が大鍋で作ってくれた美味しい芋煮を味わいながら楽しく歓談した。(この間、子

供達は葛のつるを探してきて綱引きに夢中。)しばし歓談後、宮城支部の活動紹介を行い富塚支部長の閉会の挨拶を行って、少し早めではあったが降雨前の12:30に現地解散とした。

今回開催の親子登山教室は、子供達に登山の方法や注意点を教えるだけでなく、山の自然に触れる喜びそして山の恵みなど、登山の楽しさについて総合的に伝えることができた登山教室であった。

(4) 第35回東北・北海道地区集会交流山行(蔵王古道)

・実施日:令和元年10月6日(日)

・山域:宮城蔵王(蔵王古道)

・参加者:(宮城支部会員)富塚和衛、佐藤昭次郎、草野洋一、太田正、横山哲、千葉正道、千石信夫、富塚眞味子、鳥田笑美、遠藤銀朗

(宮城支部準会員)新井田祐治

(宮城支部友会会員)山田孝司、針生紀子

(宮城支部一般)工藤千鶴子、斎藤真、白幡典子、染谷由美子、田中真理子、森宮子、岡部たえ子

(北海道支部)長谷川雄介、漆崎裕子、藤原 仁、藤原千恵、石田栄子、縄田さかゑ、池田真由美

(青森支部)中村 勉、大久保 勉、須々田秀美、中村 仁、津島永孚、平尾勝美、遠藤智久

(岩手支部)阿部陽子、中屋重直

(秋田支部)今野昌雄、三浦昭男、鎌田倫夫

(山形支部)野堀嘉裕、佐藤一広、安井康夫

(福島支部)佐藤一夫、小林正彦、渡部展雄、菊池道彦、力丸美智子、竹永哲夫、渡部展雄、石井洋子、熊谷鶴三

(千葉支部)石岡慎介

(東京多摩支部)大船武彦、下田俊幸

登山隊本部誌:(宮城支部会員)高橋二義、加藤知宏、山口 正人(医師)

(宮城支部友会会員)岩淵利秋

(一般)猪股喜子(看護師)

(蔵王古道の会)川合 隆

蔵王古道の会案内役:

遠藤裕一、跡部 隆、浦川明彦、追木 丘、小室美雪、三島木進(計 66 名)

・報告者:千石信夫

第 35 回東北・北海道地区集会交流山行は令和元年 10 月 6 日に、各支部会員、支部友そして二口山歩会および登山本部誌と先達役を務めてくれた「蔵王古道の会」の皆さんなどを含め、計 66 名の参加者で催され、蔵王古道を遠刈田温泉から刈田岳山頂までのコースを歩いた。その内容を報告する。

この山行は蔵王古道、Aコース(全行程)・Bコース(澄川レストハウスから山頂)とした。早朝から天候は雨となったが検討の結果、決行することにした。

ホテル前 6:50 集合し出発式、支部長挨拶そして「蔵王古道の会」遠藤裕一会長から挨拶とコースの注意点などお話をいただいた。Aコース隊から 4 班に分けてそれぞれ出発。Bコース隊はホテルからバスを利用し澄川レストハウスからの登山とした。出発後、雨もあがり天候も回復し快適に登ることができた。AコースとBコースは澄川レストハウスから合流する予定だったが、予定通りにはいかず大黒天付近から合流し各班前後しながら行動となり若干予定時刻を超過したが無事登頂することができた。山頂からはバスにてホテルまで全員下山。その後ホテル前にて富塚支部長から最後の挨拶、そして次回青森での再会を誓い解散となった。

緊急時の対応策は事前に策定した通りに、登山隊本部を設置し各コースリーダー、班長、救護班、医師、看護師など万全の体制を組んだ。そのうえ古道の会からは各班に先達として同行いただいた。2 名の看護師さんはみどり台外科内科小児科医院の協力をいただき対応することができた。

最後にこの度の集会において企画段階から後援、協力をいただいた蔵王町、「蔵王古道の会」の皆さま、そしてはみどり台医院の山口会員(院長)及び看護師の皆さまに対し、労を惜しまずご支援をいただきましたこと心より感謝申し上げます。

(5) 第 8 回登山教室(北泉ヶ岳・泉ヶ岳)

・実施日:11月10日(日)

・山 域:船形連峰北泉ヶ岳～泉ヶ岳

・コース:オーエンス泉ヶ岳自然ふれあい館前駐車場水→水神→三叉路→北泉ヶ岳→三叉路→泉ヶ岳(昼食)→(滑降コース)→お別れ峠→駐車場

・参加者:(会員) 冨塚眞味子、冨塚和衛(支部友会員) 村上敏郎、津久井宏、白田昭一、鳥田伊志、多田孝徳、佐藤富士子(一般) 川村裕信、川村ゆき子、菊池しず子、小山敏男、三村好栄、平間壽範、阿部真美、楊永世英、宮崎浩幸、今井弘、今井一枝、永野仁、上田一広(21名)

・報告者:冨塚和衛

今年度2回目となる第8回登山教室を泉ヶ岳山域で実施した。8:00に大駐車場に集合する。天候は晴れも少し風がある。参加者21名が集合したところで、コース概要を説明する。加えて公益社団法人日本山岳会及び宮城支部のガイダンスを行う。8:40、登山ポストに登山計画書を投函し、登山開始。参加者の中には登山が初めての人もあり、ゆっくりペースで水神コースを一路石碑が立つ標高825mの水神を目指す。標高を上げるにつれ周囲の広葉樹は色を残す木々が少なくなる。

9:30、水神に到着する。此処で一本入れる。21名の足取りは順調だ。休憩時間を利用して安全登山のための最低必要な装備品(雨具・ヘッドランプ・地図とコンパス)について説明する。



水神から北泉コースに道を取り、標高1,253mの北泉ヶ岳に向かう。サビ川を渡り春には山野草が咲く「お花畠」を過ぎ、大岩が転がる急登を一気に登り、10:15、標高1,085mに位置する三叉路に辿り着く。此処で2回目の休憩を取る。休憩を利用して登山での歩き方を簡単にレクする。

登山者が数人通り過ぎた後、追いかけるように北泉ヶ岳山頂を目指す。「4本桂」を過ぎし一登りすると北泉ヶ岳の山頂だ。

時刻は 10:45。北泉ヶ岳山頂は残念ながら眺望が利かない。15 分ほど休憩後、記念写真を撮り、泉ヶ岳(1,172m)に向かう。三叉路まで下り、此処で道を左に取り「くまざさ平」をゆっくりペースで登る。途中で一休みする。周囲の木々はすっかり葉を落としている。呼吸を整えたところで、泉ヶ岳山頂を目指す。山頂の手前に眺望が利く平らなガレ場がある。此処で昼食を摂ることにした。時刻は 12 前。風は冷たいが眺望は抜群だ。蔵王連峰から船形連峰までが丸見えだ。船形山の山頂付近は白いベールに覆われている。一般参加者も宮城の山岳風景に感動していた。

昼食後、泉ヶ岳山頂で記念写真を撮り、12:35、下山開始。帰路は滑降コースを取った。カモシカコースを左に分け、大壁を一気に下る。標高 900m の見返平一本入れ、お別れ峠を過ぎ、大駐車場へと帰る。

14:00 過ぎ、全員無事、トラブルもなく帰還した。予定タイムより 1 時間程早い第 8 回登山教室山行だった。一般参加者の平均年齢が 50 代であった事もあり思ったより早いとなった。今回の登山教室には初めて外国の方も国際色ある山行となりました。

2019 年度山行事業以外の宮城支部活動記録

(1) 第 35 回日本山岳会東北・北海道地区集会特別委員会報告

・報告者:千石信夫

平成 30 年の 10 月の役員会にて次回開催の宮城支部担当である東北・北海道地区集会についての検討がなされ具体的に準備作業を進めることとなった。その後準備委員が選任され、第 35 回東北・北海道地区集会特別委員会として組織された。そのメンバーは特別委員長に千石信夫、事務局に富塚和衛、委員に遠藤銀朗、富塚真味子、高橋二義、佐藤昭次郎、千葉正道、太田正、草野洋一と決まった。

12 月には第 1 回の特別委員会が開催され、最近の開催された各支部の資料などを参照し日程、場所、講演会などの意見を出し合った。第 2 回では、場所の選定では交通事情、宿泊事情などの条件をふまえて、様々案が出されたが、富塚支部長から昨年個人的に参加した蔵王古道の案が出され、地元蔵王町の観光にも貢献できることと、さらに古道の会の協力も得られることで、開催地として決定した。日程は 10 月 5～6 日とした。蔵王古道の会に今回の事業についての後援もお願いをし、快諾を得ることができた。今回の交流山行について懸案事項は紅葉シーズンの渋滞が予想されること。そして、古道ルートの一部にエコラインの横断箇所があり道路交通法上の規制対応であった。

8 月 24 日には蔵王古道の会主催の「蔵王御山詣り」に参加して下見山行とし、本番に向かってルート確認や現地の状況を把握し大いに参考となった。

10 月 5 開催の講演会は、蔵王町の教育委員会のご協力をいただき社会教育主事の佐藤洋一様に講師としてお願いした。演題は「蔵王の信仰の歴史と蔵王古道」、一般の方々も参加できる講演会とした。

古道の会からの応援としては先達 7 名の方々と一緒に歩いていただくことになった。

そのほかには救護班として山口医院の看護師さん 2 名、車で待機していただくことになり大変ありがたく感謝申し上げたい。さらには、参加者の中に二口山歩会の皆さんも参加いただき交流ができることになった。

今回の集会は、各方面のあたたかい支援を得た開催となったが、あくまでも我が宮城支部主催であるので、特に交流山行については我が支部が責任と自覚をもって進めることを申し合わせた。9 月 20 日に最終の打ち合わせを行い全 7 回の特別委員会が終了した。

現時点で、台風 18 号の影響も予想されたが、大きく崩れることがないようである。無事下山し集会の盛会を祈念して特別委員会の報告といたします。

(2) 令和元年度宮城支部ビールパーティー開催報告

・報告者: 木皿 謙

地球温暖化が叫ばれその深刻さも年と共に増してきている作今この暑さを吹き飛ばす対策？の一つJAC宮城支部恒例のビールパーティーが、これも例年通り仙台駅近くのホテルJALシティで15名の参加を得て華々しく開催されました。

昨年のビールパーティーの報告で「人数と予算の関係で会場が雑然として…」との口説き駄文がホテル側に聞こえたらしく今回はキチンとした個室が用意されており、しっかり落ち着いた雰囲気で開催されました。参加者は、最近右肩下がりで減少気味でしたが、会場の所為か昨年より若干増えて15名のご参加を頂き担当して何よりの喜びです。

千田早苗氏の発声で乾杯。今年の主題は支部創設60年を記念しての台湾玉山遠征の話題が中心で、草野洋一会員からはチロル・ドロミテ地方のヨーロッパアルプストレッキングの記録報告もありました。

参加の皆様のスピーチにあった通り、恒例のビールパーティーが当支部行事の大きな柱になっていることを痛感させられた集まりでした。来年の盛会も併せて愈じつつ、めでたく閉会。参加者各位に感謝いたします。

(3) 日本山岳会東北・北海道地区集会開催報告

・報告者:遠藤銀朗

令和元年10月5日、6日に、宮城支部主催で日本山岳会東北・北海道地区集会が蔵王町遠刈田温泉で開催された。地区集会にはメンバーである東北・北海道各支部に加えて東京多摩支部、千葉支部、遠くは岐阜支部から総勢約70名の参加を頂いた。東日本大震災(2011.3.11)のため中止した年があったが、今年度の開催が全国支部懇談会と同様に第35回になった。この間、今回を含めて宮城支部は8回の東北・北海道地区集会を主催することになった。

開催に当たって、宮城支部内に東北・北海道地区集会特別委員会を設置し、先ず開催場所を、過去3回(秋田支部・岩手支部・山形支部)の地区集会の実施内容等を参考にさせて戴き、「地元につながる山に関わる生活・文化」をコンセプトに対象山域を宮城蔵王の「蔵王古道」とすることに決定した。以後、通

算 7 回の特別委員会を開催し、東北・北海道地区各支部の会員等の皆様をお迎える準備を行った。

1 日目(10 月 5 日)は、ACTIVE RESOORTS MIYAGI ZAO ホテルにおいて 14:00 からの参加者の受付を行い、14:30 から同ホテル3階「エメラルド」の間において東北・北海道地区支部長会議を開催した。これに続き、15:30 から記念講演会を実施した。講演は、蔵王町教育委員会生涯学習課課長補佐兼社会教育主事の佐藤洋一氏に「蔵王の信仰と歴史と蔵王古道」と題して実施いただいた。講演内容は、蔵王山以前、修験道の流入(蔵王山の誕生)、修験勢力の移り変わり、「蔵王の御山詣り」ルートと参詣登山等についてのお話でした。蔵王古道交流登山の予備知識としても大変に有意義な講演であった。



同日 18:30 から、同ホテル3階「サファイア」の間において交流懇親会が開催された。交流懇親会では、来賓として出席いただいた地元蔵王町長の村上英人氏からご祝辞を頂き、そのご前回開催支部の野堀嘉裕山形支部長の乾杯の音頭で宴会が始まった。宴席では



各支部代表者から交流のスピーチをいただくとともに、各支部の「地元ソング」が和やかに、披露され、中にはハーモニカ伴奏付きの支部もあり、交流・親交の宴は大いに盛り上がった。この交流懇親会が閉会となった後も、同ホテル1階「カナリア」において二次会が開催され、時間が許される限度まで交流の場が盛り上がった。

2 日目(10 月 6 日)の交流山行は、蔵王は国定公園に指定されている東北地方を代表する山域で行われた。記念講演会において佐藤洋一氏から紹介されたように、蔵王山は古来より修験者の山として崇められてきた信仰の山で、当日は紅葉が誘う古の道を辿った。この東北・北海道地区集会交流山行の詳細については、千石信夫会員の山行報告をお読みいただきたい。

(4) 令和元年度宮城支部年次晩餐会開催報告

・報告者: 木皿 謙

今年の日本山岳会宮城支部の年次晩餐会は、12 月15日(日曜日)例年通り仙台一の繁華街東一番町通りに面したスマイルホテルの 3 階、シェルブールで開催されました。参加者は何故か 13 名、今年最後の晩餐会に相応しい人数でした。会は、富塚支部長の挨拶、千石会員の乾杯の発声でスタート、いつもながらの和気藹々の進行でした。

恒例のオークションも開催しました。参加者が少なく盛り上がりもイマイチかなと心配しましたが、故遠藤正治会員のご遺族から託された遺品のピッケル辺りになると結構白熱した雰囲気になり、売上げ金額は 35,300 円となりました。総括としては参加者、売り上げ共にもう一段の底上げが欲しかったと思いましたが、そこはJAC、会は最後まで和やかに進行致しました。

2019 年度宮城支部以外の行事参加記録

(1) 第 35 回全国支部懇談会参加報告

参加者: 富塚支部長、富塚眞味子(会計担当)以上 2 名

報告者: 富塚和衛

令和元年 5 月 25 日(土)~26 日(日)の2日間、第 35 回公益社団法人日本山岳会全国支部懇談会が奥日光・光徳(日光市)「日光自然博物館」・「日光アストリアホテル」を会場に行われ、これに参加したので報告する。全国 27 支部から約 160 名が参加、宮城支部からは2名が参加した。

【1 日目】

・開会式 渡邊栃木支部長歓迎挨拶
大島一生日光市長来賓挨拶

・記念講演

「近代登山とアーネストサトウ父子の日光への山旅」

講師 飯野達央(栃木県職員OB、栃木県立博物館協議会長など)

・懇親会

各支部のスピーチは 2 次会で行われた。

【2 日目】

・交流山行

①湯元~切込湖・刈込湖~光徳牧場ハイキング(A)コース

②英国・イタリア大使館別荘記念講演見学コース

・宮城支部はAコースに参加。

(2) 自然保護全国集会参加報告

・報告者: 高橋 二義

今年の自然保護全国集会は、埼玉支部の主管で、7 月 6 日(土)~7 日(日)の両日、大宮駅の一つ先東北本線さいたま駅近くの、「埼玉県男女共同参画

推進センター」で開催されました。宮城支部からは、自然保護委員長の柴崎支部長が用事のために、宇都宮委員と高橋委員の2名で参加しました。

開始後、基調講演が二つあり、分科会は三つ用意されておりました。宮城は二人出席しておりましたので第一分科会は『絶滅危惧種の保全』と云う課題には宇都宮氏が出席し、第三分科会は『山に自然を守るために出来る事』と云う課題には高橋が出席いたしました。

分科会では、各支部からの活動報告がそれぞれ発表されました。宮城支部からは、二つの点をお話いたしました。その一つは、東北大震災時に発生した大津波の被災地復興事業の一つに被災地各町で地盤の高上げ工事が展開されておりますが、その盛り土に使われる土が、近くの里山が土取り場となり、里山の自然が無くなり、景観が大きく変化している事と、今一つは、栗駒山の世界谷地で宮城県自然保護課が主催している、「笹の刈り取り作業」についてであります。笹の刈り取り作業は理解できるとしても、その方法が湿原植物に与える打撃が大きいのでは？と、対応の問い合わせを文書で行っても回答が無いので参加を保留している事を報告いたしました。

2日目の全体会議の中でも、特に司会の方から要望が有って同じ内容を報告しております。午後は近くの「北本自然観察公園」での観察会が計画されており、今にも降り出しそうな空模様の中、高橋が参加してきました。色々初めて出会う植物もありましたが、私にとっては「ヤブミョウガ」と云うのは、全く初めて出会った植物でした、姿は笹竹に似ておりましたが頭頂部から花茎を出して20cmくらいに花が付いており、葉の表面はザラザラしておりとても不思議に感じました。帰り近くには雨が降り出しましたて、早々に引き揚げ帰路に着きました。

(3)秋田支部設立60周年記念祝賀会及び交流参考参加報告

報告者:富塚 和衛

10月19日(土)～20日(日)に秋田支部設立60周年記念祝賀会があり、参加したので報告する。各支部等からの参加者は54名。宮城支部からの参加者は千葉正道、草野洋一、太田正、富塚和衛会員の4名。なお、秋田支部は1959年6月28日に、秋田魁新報社講堂において、全国15番目の支部として誕生

している。1日目の記念祝賀会は、外国人から「日本一有名な秘湯」と呼ばれている乳頭温泉郷・鶴の湯温泉別館「山の宿」で開催された。鈴木秋田支部長の身の丈に合った支部運営に務め古希を目指したい旨の挨拶があり、その後、設立会員であった長岩永年会員からの支部設立経緯のお話、古野日本山岳会会長の祝辞、地元仙北市副市長の祝辞あり、その後、親交のある韓国山岳協会と中華民国山岳協会からの祝詞が披露された。



最後に、佐々木永年会員から第1回東北地区集会(1982年)がこの地で開催された事など支部の歴史が紹介された。

続いて、講演会が行われた。講演は「山岳信仰と温泉」と題して、副支部長でもある佐藤和志鶴の湯温泉代表取締役会長が講師を務められた。講演の内容は、鶴の湯温泉神社に関わる事や経営に至った経緯などであった。

懇親会は会場を鶴の湯温泉本館大広間に移し、今野顧問(前支部長)の挨拶で始まり、参加支部を代表して佐藤福島支部長が祝辞を述べられた後、開会された。酒処秋田の美酒に山の料理に宴は盛り上がり夜遅くまで続いた。

2日目の交流山行はA・B・Cコースに分かれて行われた。宮城支部からの参加者は全員Aコースに参加した。Aコースは鶴の湯温泉～大白森(1215.5m)を往復するコース。天候は絶好の山行日和。8:30、鶴の湯神社に参拝し登山開始。緩やかな杉林、カラマツ林を登ると約1時間で展望台に着く。更に、ブナ林を歩き続けること約1時間、大白森が望める小白森山(1144m)に辿り着く。此処から大白森までの道に悪戦苦闘する。泥濘の登山道に足を取られ転倒する者も。最後に急斜面を登り切ると目的地に辿り着く。約3時間の山行であった。十和田八幡平国立公園に位置する山頂一帯は広大な高層湿原で草紅葉が「今が盛り」とばかりに風に棚引いていた。実に長閑である。岩手・秋田を代表する奥羽山脈を形成する山々の眺望を楽しみながら昼食を戴いた。帰路は往路を下山、15時前に鶴の湯温泉に着き、解散となった。

(4) 令和元年度支部連絡会議及び講演会・年次晩餐会参加報告

報告者:富塚 和衛

令和元年 12 月 7 日(土)、本部主催の支部連絡会議及び講演会・年次晩餐会が京王プラザホテルにおいて開催されこれに参加したので報告する。

午前中の支部連絡会議では冒頭、古野淳新会長から「新しい時代に向かって①遭難防止 ②山岳文化 ③支部活動 ④自然保護の四つの柱」推進していく旨の挨拶があった。その後、永田弘太郎総務担当常務理事司会の元、会議が進められた。会務報告・連絡として、①120 周年記念事業の進捗状況 ②「山の天気ライブ授業」今後の予定と開催希望山域 ③登山計画書提出状況と事故事例について ④支部での名簿作成及び個人情報について ⑤山岳エリアにおける被害情報について(会場内に展示及び「令和元年の台風及び豪雨による山岳被害状況～全国支部の被害調査」として冊子化配布)等の報告・連絡があり、その後質疑応答があった。また、今後の「山の日」記念事業が 2020 年大分県、2021 年山形県で予定されている旨の報告があった。

午後からの令和元年度年次晩餐会記念講演会が開催された。講演は次の通り。

第 1 部:日本・エクアドル外交関係樹立 100 周年記念友好合同登山隊報告「赤道直下の氷河の山での交流」演者:渡辺雄二栃木支部長

第 2 部:第 21 回秩父宮記念山岳賞受賞記念講演「西表島からボルネオ島へ」演者:安間繁樹会員

第 3 部:海外登山助成登山隊報告「ラオポシ南壁初登攀」;中島健郎会員

第 4 部:特別対談「いま、極地に注目！～地球環境を考えるために」;舟津圭三氏(南極犬ぞり横断等)、荻田泰永氏(南・北極地単独行等);(聞き手・神長幹雄会員)

夕刻からは年次晩餐会が令和天皇ご臨席の元で開催された。会員等の参加者は 500 名を超えた。宮城支部からは筆者と柴崎会員の 2 名。晩餐会は会長挨拶後、物故会委員への黙禱に続き、新永年会員顕章(代表挨拶節田重節会員)、第 21 回秩父宮記念山岳賞表彰(安間繁樹会員)、高額寄付者への感謝状贈呈(梶正彦会員)、新入会員紹介代表挨拶(中谷健太郎(中 1 年))があり、

鏡開きが行われた。鏡開きには法被姿で天皇陛下も登壇、木槌を振り下ろされ、会場は大いに盛り上がった。この後、八木原國明会員（日本山岳・スポーツクライミング協会会長兼群馬県山岳連盟会長）のご発声で乾杯が行われ、宴会の幕は切って降ろされ会員相互の懇談が行われた。晚餐会は予定時間を大きく過ぎて閉会となった。

個人山行紹介およびエッセー

栗駒山の思い出

草野洋一

宮城、岩手、秋田3県にまたがる栗駒山(1,627m)には4回登っています。初めての栗駒山登山は1978年(昭和53)秋。いまは廃線になった「くりはら田園鉄道」(当時は栗原電鉄)が営業していた。上野駅発の夜行急行「十和田」に乗り、石越駅に早到着。栗原電鉄の始発電車に乗って栗駒駅下車。バスで「いわかがみ平」へ。東栗駒コースで正午すぎ山頂に。頂上には赤トンボが乱舞していたのが印象的だった。この日は須川温泉に泊まる。想像していたより大きな宿と露天風呂に驚いた。宮城の人の案内で「おいらん風呂」(蒸しぶろ)にも入った。翌日は昭和湖、須川分岐、御室経由の湯ノ倉コースを通過してランブの宿「湯ノ倉温泉」に下りた。途中クマにもヒトにも会わず、静謐な山道だった。川べりの露天風呂で川の流れと森を眺めながら一人温泉を満喫した。現在は地震の被害を受けて廃業しているようだ。

2回目は東京の友人が「栗原電鉄に乗車するので一緒に行かないか」の誘いがあり、同行した。彼は「乗り鉄」で日本の鉄道全路線に乗車することに挑戦中で、未乗車は僅かと言っていた。乗車後、せっかく来たのだからと登山に誘った。3回目は2009年10月。岩手・宮城内陸地震のあとで、宮城県側の登山道が閉鎖されていたため岩手県側から登って須川温泉に2泊した。頂上からの展望は期待通り見事な紅葉だった。4回目は2018年(平成30)6月。山岳会の秋田、岩手、宮城支部の合同登山に参加。下山後、麓にある栗駒温泉で汗を流した。同温泉は大水害にあって流失し、仮小屋で営業していた。

栗駒山の紅葉は見応えがあり、周辺に温泉施設もあってまた行きたい山ではある。残念なのが中央コースの登山道がコンクリートであること。今までの山登りでこんな登山道はどこにもなかった。一般の人にやさしく登れるようにしたつもりだろうがやりすぎだと思う。初めて見たときはびっくりした。

百名山最後の山「水晶岳」

富塚和衛

足掛け 20 年に渡る夫婦での日本百名山踏破の最後の山は、「水晶岳」だった。2014 年 9 月、99 番目の山として「塩見岳」を登ったその足で、「水晶岳」目指した。登山前日は、大町の七倉山荘にお世話になった。

次の日の早朝、タクシーで東京電力が管理する登山口がある高瀬ダム向かう。ダム右岸の登山口に取り付き「ブナ尾根」を登り、管理の行き届いた烏帽子小屋に辿り着く。花崗岩からなる砂礫の美しい登山道を、遅咲きの高山植物を見つつ、野口五郎岳を目指す。道中、徐々に天候が悪化し、強風が吹き荒ぶようになる。14 時頃に野口五郎岳に到着する。夕食後、明日の天気が前線通過の影響で荒れ模様であることをテレビで知る。トムラウシの遭難事故が頭を過る。

2 日目、未明から風切り音がする程の強風が吹き荒れ、雨粒が小屋を叩きつけている。風の中、山小屋を出て行く登山者もいたが、今日の山行は断念して滞留することにした。昨晚から、体調が本調子でないことも滞留することにした理由の一つだ。胃の周辺が痛み出したのだ。この日は、朝食後、管理人さんから貰った胃腸薬を飲み寝て過ごした。夕食の頃には、天候も大分回復し燕岳方面の稜線が姿を現していたが、体調は依然優れない。

3 日目、体調はすこぶる悪い。胃がキリキリと痛む感じが続く。朝食抜きで、水晶小屋に向かう。天気は絶好の山旅日和。野口五郎岳の頂を踏み東沢乗越を過ごし水晶小屋に辿り着く。小屋から、妻が登っていなかった鷲羽岳を二人で往復し水晶小屋に戻る。これで 99 座を夫婦で踏破したことになった。実は、前に鷲羽岳に挑んだことがあったのだが、太郎平小屋から薬師沢小屋に向か

う途中の木道で妻が転び尾骶骨を強打し歩くのも儘ならなくなってしまい鷲羽岳は諦めざるを得なくなり、私一人で登った事があったのだ。

小屋で一休みし、愈々、百名山最後の山「水晶岳(黒岳)」に向かう。12 時、小屋を出発。高山植物が疎らに咲くガシ場の緩やかな坂道を進み、最後の岩場の急登を登り詰めたところに水晶岳の山頂があった。予想に反して、岩がゴロつく狭い山頂であったが、2014 年 9 月 6 日 12 時 35 分、遂に、夫婦で日本百名山最後の頂を踏んだのだ。長い道



水晶岳山頂

程だったが、大きな事故もなく完遂できたのも二人とも健康であったが故と、健康の大事さを改めて痛感した。また、家族の理解も忘れてはならない事だ。昨日の天気とは打って変わって快晴、山頂からの視界は素晴らしく、周囲を遠望すると、この頂は北アルプスのど真ん中に位置する事が実感できる存在だ。息子が日本百名山踏破記念に作ってくれた旗を手に山頂にいた登山者にシャッターを押して貰い、100 座の山行を思い出しつつ 1 時間程滞在してから下山した。冷たい風が拭き始めてきた。山頂に向かう多くの登山者と擦れ違う。今夜の山小屋は込み合うことが予想された。夕食には山小屋定番の「カレーライス」が出されたが、食欲がわかない。床に入るも眠れない。体調が回復しないのだ。夜中から風雨が強まる。

4 日目、今日は、帰仙の途に就く日だ。体調は戻らないが霧雨の中、早朝に山小屋を出発する。風もある。野口五郎小屋に立ち寄り一休みする。帰路は竹村新道を予定していたが、体調がままならず、来た道を引き返すことにした。途中ライチョウに見送られ烏帽子小屋に辿り着く。大休止後、ブナ尾根を下り、高瀬ダムから予約しておいたタクシーで七倉山荘へ戻った。夕食の焼き肉を少々頬張り早々床に入った。

5 日目は、車で仙台に帰るだけだったが、体調は相変わらず回復しない。上信越自動車道を通り北関東自動車道の東北自動車道合流手前のトンネル

で異変が起きた。目の前が翳むようになって来たのだ。それでも何とか、無事、自宅に辿り着いたのだが、その晩、脂汗が出るほどの痛みが襲ってきたのだ。丁度、次の日は半年毎の外科手術後の定期検査の日だったので、数日間の身体の異変について主治医に話をしたところ、何と、その原因は、胆石が胆管に詰まり炎症を起こしたのだと、CTの映像を見せてくれながらの説明だった。結果は、急遽、入院が決まり、先ずは、肝臓に炎症が及ばないように治療を受けることになった。落ち着いたところで内視鏡による十二指腸流出部の詰まった胆石の除去手術、その後、胆嚢の腹腔鏡による除去手術と、病院生活が続いた。考えてみれば、仙台に帰る途中に目の前が翳んだのは、患部からの出血による貧血だったのではないかと、今でも思い出すとゾッとする。山小屋での黒い物体の排出は、その証だったのではなからうか。そんな事もあり、日本百名山最後の山「水晶岳」は満願成就した達成感も確かに大きなものがあったが、九死に一生を得た山旅でもあった。

振り返ってみれば、百名山最初の山は「燧ヶ岳」であったが、この時は、将に、登山支度もろくにせず、山では命の水とも言われる飲み水も持参せずに山をなめたような登山であった事を思い出すが、最後の山での体調不良は、その罰としての山の神様からの戒めだったのかも知れない。山に登るときは、事前に体のコンディションを整え、確りした計画を立て、必要な装備を確認し、万が一に備えて登山計画の家族等との共有する事が、基本で且つ重要であることは言うまでもないが、登山の経験を踏めば踏むほど慣れが生じ、基本を等閑にしてしまうのもまた人間の心理なのかもしれない。



水晶岳から望む北アルプス

新会員・新準会員自己紹介

登山遍歴と近況について

加藤 知宏(会員番号:16356)

私が登山を始めたのは、秋田県立秋田南高校入学後に山岳部に入ってからである。新入生用のオリエンテーションで偶々勧誘を受け、新入生歓迎登山で秋田市の山奥にある太平山に行ったのが初めての山行だった。

入部当初はそこまでのめり込んではいなかったものの、その後、全県総合体育大会や夏山合宿などを通して、登山の面白さにのめり込んでいった。特に、夏山合宿は3~4人のパーティを組んで、1週間程度テント泊をしながら、槍ヶ岳や奥穂高岳、常念岳、を縦走するという内容で、30kg超のザックを背負いながら、パーティのメンバーと寝食を共にするという、それまでの生活では味わえない体験となった。



高校卒業後は、弘前と札幌で大学生活を過ごしたが、そこでは山岳サークルに入会し、岩木山や大雪山旭岳、後方羊蹄山、斜里岳などに登った。この時期に印象に残っている山行を挙げるとすると、卒業旅行で1週間、屋久島に滞在し、九州地方最高峰の宮之浦岳に登ったことである。淀川登山口から日帰りに登ったわけだが、雨の多い屋久島で、幸いにも天候に恵まれ、山頂からは九州の本土や種子島などを臨むことができ、学生生活の締めくくりとして思い出深い山行となった。

大学卒業後は地元秋田に戻り社会人生活を始めたわけだが、仕事がメインの生活となり、登山をするのは年3~4回程度、友人と鳥海山や月山、秋田駒ヶ岳などに日帰りで行くことが多くなった。

その後、縁あって宮城県に移り住むこととなったが、そこでも復興関連の仕事がメインの生活となり、登山には殆ど行かない期間が続いた。しかし、仕事も多少落ち着いて、何か始めようとしたときに思いついたのは、登山であった。個人山行も考えたが、団体に加入して活動した方が技術の向上や知識の習得にも役立つと考え、適当な団体を探していたところ、偶々日本山岳会宮城支部の存在を知り、入会することとなった。入会後は、ベテランの会員の皆さまと活動を共にし、技術向上や宮城の山を知ることに努めている。



今後は、海外の山にも登っていきたいと思う。具体的には、アイガーやマッターホルン、ユングフラウなどのヨーロッパアルプスの峰々、キリマンジャロなどである。コロナ禍が、落ち着いたら、挑戦したいと思う。

なお、私事で恐縮だが、令和2年3月に長男が生まれた。現在8か月余りで、つたい歩きをしており、歯が生え始めるなど、日々の成長に驚かされる。仕事や育児との両立しながらの活動となるが、これからも積極的に支部の活動に関わっていきたいと思う。

小学生登山で思うこと

新井田 裕治(準会員番号:A0058)

6月に毎年恒例になっている小学校(仙台市内の母校)の野外活動授業の一環で「小学生登山」に参加してきました。メンバーは、私も入れて山岳会のボランティア6名です。

山は、仙台市北部にある泉ヶ岳(1175m)で、参加者は我々と5年生(213人)と先生方です。子供たちとの触れ合いは、刺激があってとても楽しいものです。

最近の小学5年生を見て思うのは、肥満児の数が減って来ているということです。この小学校だけかと調べていると、肥満児が増えて社会問題化して

いた平成 17 年(2005 年)に食育基本法ができ、翌年には、文科省から食育推進基本計画が出されていました。

また、各学校への栄養教諭の配置も徐々に進んで来ていて、かなりの成果が表れて来ているのだと知りました。確かに菓子メーカーもコマーシャルの自主規制を始めたりもしていましたが、何より各保護者が危機感を持って取り組んで来た成果が表れているのだと思います。「やればできるのです。」でも、コロナのせいなのか？最近また菓子メーカーのテレビコマーシャルが増えつつあるのが、ちょっと気になっているところです。

それに引き換え、気になったのは、登山の最中でも「5 人組」「6 人組」と言われ、別行動をとる子供達がいることでした。特別クラスのある小学校では、もっと多くの「発達障害」の子供達がいるようです。原因は、よく分かっていないようですが、社会的に認識が深まって来ているせいなのか？いろいろな言われている食品添加物なのか？環境ホルモンなのか？電磁波なのか？etc…。素人目では、1 つでは無い様に思えますし、これも生活環境の変化が絡んでいるように思えてなりません。現在、11~12 歳の小学 5 年生は、10 年後(2030 年)は 22 歳、20 年後(2040 年)32 歳、30 年後(2050 年)42 歳になって社会の中核を担っているはずで、私達は、そんな子供たちにこれからどんな社会を手渡すことができるのでしょうか？

COP21 で日本は、CO₂ を 2013 年比で 2030 年には 26%削減、2050 年には、80%削減を約束していました。環境省も「長期大幅削減に向けた基本的な考え方」の中で「長期低炭素ビジョン」を発表しています。目指す到達点は、80%を目座す為に ①省エネ ②エネルギーの低炭素化 ③利用可能エネルギーの転換(電化、水素等)を掲げ、前向きな絵姿を描いていますが、発電における原発・石炭火力等の問題に押され、ビジョンは遅々として進んでいなかった様に思えます。日本の使用エネルギーの 20 数%の電力問題に引っ張られて、多くの他のエネルギーへの対策が目に見えては進んでいません。しかし、幸いにも今年、菅政権になってから「2050 年までに CO₂ 排出量を実質ゼロにする」と宣言されました。その意義は、とても大きく、これからの大きな変化に期待したいところです。

肥満児の増加への危機感から法制化が始まり 15 年でやっと成果が出てきたように、環境問題も今、思い切った施策の法制化を図って国民全員が努力しても、15 年や 20 年あるいは 30 年の歳月が必要です。問題は、今まで重厚長大と中央集権的なエネルギー企業に政治家や経産省が軸足を置きすぎて来たことです。その辺の対応が、管政権にできるのか？しっかり見守っていく必要があります。

企業の中には環境問題と経済成長は両立すると RE100 をはじめ、SDGsの達成に前向きに取り組むところも出て来ております。今必要なのは、地方・中央を問わず、法制化のカギを握る政治家へのアプローチと、将来を担う子供達と子供を通してその保護者への啓発活動がとて大切と考えるこの頃です。

追 悼

西郡光昭先輩逝去を悼みて

宇都宮 昭義 (13678)

西郡光昭先輩 (日本山岳会会員 7354) は、田尻町の西郡旅館の長男として生まれ、田尻小学校、東北学院中学校・高等学校、信州大学医学部と進まれ、卒業後は長野県・宮城県の公衆衛生医師職員として勤められ、退職後は宮城教育大学教授、その後、YKK専属産業医として享年80歳で逝去されるまで医学博士としての職務を続けられました。

それ以上に、西郡光昭先輩は私にとっては、大学・そして社会に出てから亡くなられるまで一貫として登山活動の大先輩であります。(以下先輩を「西郡さん」と呼ばせていただきます)

西郡さんが信州大学山岳会・伊那松本山岳部4年部員だった昭和38年春に、私は信州大学山岳部土木工学科入学と同時に念願の山岳部にも入れました。(最初の3年間は授業の受講日数より山岳部の活動日数が断然多くて、教授からは「君は同じ学部でも山岳部に入って仕舞った様だ」と苦言を呈されました)

信州大学山岳会の昭和35年度新入部員は西郡さんをはじめ高校から山岳部員が多くて粒揃いで、各岩場初登攀が多い小谷さん・池田さん、雪の出島さん、穂高仙人川崎さんなど伝説の人ばかりですが、同期の皆さん方に聞きますと、中でも西郡さんは抜き出でいて昭和37年に農学部の伊那山岳部と

文理学部・医学部の松本山岳部が合併をして伊那松本山岳部となった時の初代CLは、3年部員だった西郡さんでした。

当時の伊那松本山岳部には、新人哀歌にある他大学山岳部特有の“シゴキ”はありませんでしたが、4年部員の小谷さんがCLで、3年部員の松尾さんが統括する2年部員で新人係の小川さん・新谷さん・西坂さんは我々新人を鍛えてくれて深い接触がありましたが、小谷CLと同期の西郡さんは前年のCLだった方なので、新入部員にとっては8年部員～5年部員と並んだ雲の上の別世界の人でした、おまけに医学部旭町校舎と教養学部縣の杜校舎とは場所も離れているので下界で顔を合わせる事もなく、新人合宿から春山合宿まで総ての合宿でご一緒した筈ですが、合宿中に会話を交わしたり直接指導を受ける事は無かった気がします。

2年部員の秋の前穂高岩合宿あたりから少し会話が交わされる様になった気がします、そしてその後5～6年経っても西郡さん独特の笑顔と囁れ声は全然変わる事はありませんでした。

信州大学山岳会の数え歌に、「ひとつとせ～」から「と～おとせ～」そして「おわりとせ～」と続いた後に加えられた1節があります。

おまけとせ～

おらた
俺達の夢は ヒマラヤで

山に アラヨを響かせる

そいつは 出来るかな？

そいつは 出来るとも !!



この節は、昭和37年度(昭和38年3月)「積雪期梅池～鹿島槍極地法登行」合宿中に加えられました。(ピバーク体制による鹿島槍アタックメンバーは西郡さんと柴田さん)

その後、数え歌の節通りに西郡さんは強いリーダーシップを発揮して、昭和41年に信州大学山岳会(SAC)ネパールヒマラヤ遠征研究会設立、昭和42年には各学部OB会を統合して信州大学学士山岳会(SAAC)としてSAAC&SAAC海外登山実行委員会を立ち上げ、当時ヒマラヤ遠征に必要な推薦を得るためにSAACを日本山岳会・長野県山岳協会に団体加盟させました。

それに並行して昭和42年ネパール王国踏査隊派遣、自身は昭和42年・長野県山岳協会ペルーアンデス登山隊を手始めに、昭和45年年エベレストスキ

一探検隊に参画して、信州大学山岳会に海外登山の基礎を作りあげて、昭和46年信州大学アンナプルナII峰遠征隊隊長を勤めて、その後数多の海外遠征隊を派遣する組織と人材を育てあげました。

初期の日本ヒマラヤ協会(HAJ)で昭和50年インド、ヌン峰(7135m)、昭和53年パキスタン、バツラ峰(7594m)でも活躍をされ、田辺治・吉田秀樹・二俣勇司ほかその後ヒマラヤ等の高峰で活躍したSAAC後輩会員のHAJへの仲介役でした。そして現在は彼等から受継いだ花谷・横山・大木などのほか数多くの後輩達が世界の山で活躍しています。

医師としては、登山関係で1960年代後半から1980年代にかけて自身のヒマラヤ・アンデス等での高所登山や遠征隊隊長、随行医師としての体験を生かして、高山病と云われる高所障害の様々な症状とその予防と治療について日本登山医学研究会での指導的役割を果たしました。

また公衆衛生医師として、長野県職員に林業従事者の“はくろう病”の調査研究に大きな業績を挙げた他、宮城県に戻ってからは保健所所長・県保健衛生部長を歴任し、退職後は医学博士として宮城教育大学教授として後進の指導を行い、また企業の専属産業医として亡くなるまで勤められました。

日本山岳会には昭和47年入会、昭和49年から宮城支部に在籍し、長く役員を務め、平成3年から平成7年まで第4代の宮城支部長として支部の発展に尽力され、ご自身の得意分野でもある医療委員会や海外高所委員会などで活動をされ、平成3年宮城支部主催の海外登山、中国四川省の未踏峰、羊拱山(ヤンゴンジャン)5,273mを登攀隊長として初登頂、ほかにも当会名誉会員である故平澤亀一郎氏を通じて縁のある台湾山岳協会との交流を続けるなど精力的な支部運営に尽くされました。

私が居た頃のSACでは「オールラウンドな山登りが出来る為の基礎を会得して、後輩にはその指導をする。各自の好きな山登りスタイルの追及は卒業後にする」がモットーで、山の基礎技術・知識は勿論のこと3年目に夏は国内の岩場総てと厳冬期岩稜でのリードが出来るようにする事でした。

子供の頃歩いた南アルプスの様な山遊びが志向だったので、就職後暫くは盆休みの北アルプス以外は里山の藪徘徊専門で、海外登山主体の西郡さんとは宮城県に戻られた後も5月連休の佐藤君墓参り時の山行で年一度ご一緒する程度でした。

その後私の勤めが現場から営業に変わって仙台定住になってから時折安心して行ける小料理屋とか飲み屋を紹介して頂いたり、仙台の東日本放送に転勤して来た菅家君と一緒に日本山岳会加入を薦められてお会いする頻度が増して、いつの間にかSACでの雲の上の別世界の人から、親しくお話し出来る西郡先輩になっていました。

35年前の山形蔵王スキー行では豪快な両ストックパラレルで横倉の壁を滑り降りて、下で仰ぎ見て居たスキーヤー達から拍手を受けて照れ笑いした時

の、あの笑顔が忘れられません。

15年前の4月初旬のJAC創立100周年記念国内分水嶺踏査・船形～半森山縦走(2泊)の時、足元は長靴と言ったら「アイゼンを貸すから登山靴にしろ」と強く諫めてくれました。

案の定、荒神山北斜側は雪が付かない急斜面の岩稜で、ジャパニーズ・マウンテン・ロングブーツではザイルを繰り出して猿回しの猿に成る所でした、下山後アイゼンを返しがてらの報告時には「相変わらず雑いな～」と笑顔で迎えてくれました。

10年前の7月四国遍路逆打ちの折、連日30度以上の猛暑が続きで人影が絶えた焼山寺道を下って、鴨島温泉浴室で眩暈が激しくて立って居れず横たわって仕舞った事がありました。気の弱い私は仙台に居る西郡さんに相談しました、19時過ぎでしたが私の症状を聞いて直ちに伝手を頼って鴨島の医師に連絡して、折り返しその病院へ連れていくようにと鴨島温泉従業員に指示をしてくれました、診断は熱中症によるもので、点滴を受け朝まで病院のベッドで過ごしたら治りました。山だけでなく医師としての人脈も凄いものだと教えられました。

先輩が亡くなったいま「西郡さんの後輩になれたのは幸せだったな～」とつくづく思い返しています。そして欲を言えば「もう少し後輩として甘えていたかった」ととても残念に思います。



宮城支部定例事業の概要

(1) 令和元年度定期総会の開催

令和元年度の総会は、4月21日に仙台市シルバーセンター5階会議室において開催された。平成30年度事業報告、平成30年度収支決算報告、令和元年度事業計画案、令和元年度収支予算案、支部規約一部改正案および支部役員改正案について審議され、何れも原案通り承認された。

(2) 月例支部役員会の開催

下記の日程で、シルバーセンター5階会議室において定例支部役員会が開催された。

5月23日(木)、6月26日(水)、9月5日(木)、10月18日(金)、11月14日(水)、
1月15日(水)、2月20日(木)、3月18日(水)

(3) 支部会報の発行

支部会報として「宮城山岳通信」および「宮城山岳」を、下記の通り、発行した。

「宮城山岳通信」(令和元年度分)

第17号(令和元年7月18日)、第18号(令和元年10月15日)、第19号(令和2年1月8日)、第20号(令和2年6月10日)

「宮城山岳」第23号 (日本山岳会宮城支部設立60周年記念誌)

宮城支部収支会計報告

(1) 平成30年度収支決算書

収入の部

科目	当期予算額	当期決算額	増減額	備考
①前期繰越金	141,272	141,272	0	
運営交付金	92,000	88,000	-4,000	会員数@2,000、新人獲得奨励金
補助金助成	1,000	3,500	3,500	シルバーセンターより
支部会員の寄付	1,000	0	-1,000	
支部友会会費	51,000	45,000	-6,000	2名退会
地区集会参加費	0	1,034,000	1,034,000	第35回地区集会参加者58名、2次会費
支部行事参加費	8,000	47,500	39,500	1名×500円
雑収入	30,000	35,300	5,300	オークション売上金
②収入合計	182,000	1,253,300	1,071,300	
総収入(①+②)	323,272	1,394,572	1,071,300	

支出の部

科目	当期予算額	当期決算書	増減額	備考
①臨時雇用資金	0	0		
支部報酬謝礼金	0	26,000	26,000	地区集会先達派遣費等
旅費・交通費	0	0	0	
通信費・運搬費	60,000	39,515	-20,485	切手、ハガキ、DM便代等
会場等借用費	0	918,870	-918,870	60周年記念事業祝賀会ホテル代等
消耗品費	35,000	43,340	-8,340	インク・コピー用紙代等
印刷製本費	180,000	134,270	-45,730	会報発刊費
支払手数料	3,000	2,934	-66	振り込み手数料
慶弔費	10,000	0	-10,000	
その他	323,272	118,403	83,131	地区集会記念品代等
④支出合計	323,272	1,283,332	960,060	
次期繰越金	141,272	111,240	-30,032	

(2) 令和2年度 収支予算書

収入の部

科目	前期予算額	当期予算額	増減額	備考
①前期繰越金	141,272	111,240	-30,032	
運営交付金	92,000	74,000	-18,000	会員数 37 名@2,000円
補助金助成	0	0	0	シルバーセンターより
支部会員の寄付	1,000	0	-1,000	
支部友会会費	51,000	45,000	-6,000	支部友会員 15 名@3,000円
支部行事参加費	8,000	50,000	42,000	延べ参加者数100名@500円
雑収入	30,000	5,000	-25,000	オークション売上金
②収入合計	182,000	174,000	-14,500	
総収入(①+②)	323,272	285,240	-38,0320	

支出の部

科目	前期予算額	当期予算書	増減額	備考
①臨時雇用資金	0	0		
旅費・交通費	0	30,000	30,000	全国集会等参加助成費
通信費・運搬費	60,000	40,000	-20,000	切手、ハガキ、DM使代等
消耗品費	35,000	45,000	10,000	インク・コピー用紙代等
印刷製本費	180,000	68,000	-112,000	会報発刊費
支払手数料	3,000	3,000	0	振り込み手数料
慶弔費	10,000	10,000	0	
その他	35,272	89,240	53,968	マイカー補助金、保険加入代等
④支出合計	323,272	285,240	-38,032	
次期繰越金	141,272	0	-141,272	

* 収入の部、支出の部に関し、第 35 回東北・北海道地区集会に関する科目については計上せず。

編 集 後 記

前号の宮城山岳第 23 号は、宮城支部設立 60 周年記念誌として刊行し、その中に「宮城支部設立 60 周年記念太白宣言」を記載させていただきました。その宣言一つに、活動の足跡を後世に伝える事を謳っています。その趣旨に沿って、支部関係者の皆様のご理解とご協力を頂き設立 61 年目の会報として「宮城山岳第 24 号」を発行することが出来ました。本誌の発行を続けることにより、支部会員等にとっての目指すべき宮城支部の山岳・山岳文化活動を考えるうえでの、歴史的資料となることを期待したいと思っています。これからも、「会員等皆で編む会報」をモットーに誌面を充実していきたいと考えておりますので、今後とも惜しみない御協力をお願いし、編集後記とします。

(会報・編集出版委員長 富塚和衛)

公益社団法人日本山岳会宮城支部会報

宮城山岳第 24 号

発行日 2021 年 1 月 10 日

発行者 富塚和衛

編集者 富塚和衛、三宅泰、千石信夫、細川光一、鳥山文蔵

事務局 983-0821 仙台市宮城野区岩切字畑中 9-12

Tel・Fax 022-255-7398



ドライチンネン(写真提供:富塚和衛会員)